







# 社会貢献者表彰とは

国の内外を問わず、社会と人間の安寧と幸福のために貢献し、顕著な功績を挙げられながら、社会的に報われることの少なかった方々を表彰させて頂き、その功績に報い感謝することを通じてよりよい社会づくりに資することを目的とする。

## 第56回社会貢献者表彰の概要

### 【募集告知】

期間：2020年8月～2020年10月末日

媒体：ダイレクトメール発送、新聞への告知広告、当財団ウェブサイト等にて

### 【対象となる功績】

- ・社会貢献の功績

### 【候補者について】

- ・候補者には、年齢・職業・性別・信条・国籍等の制限はない
- ・日本で活動する方、もしくは海外で活動する日本人を対象とする
- ・候補者は、同種の功績により当財団の「社会貢献者表彰」を受賞されていない方とする
- ・候補となった功績と同一または同種の功績により、既に国の栄典（叙勲、褒賞）または、大臣表彰等を受賞されている方は、選考の際、後順位とされる
- ・人命救助に関する功績については、原則として、2019年11月30日以降の功績を対象とし、この功績の場合のみ、当該行為により亡くなられた方を含む

### 【選考について】

選考委員会開催日：2021年1月27日

### 【受賞者】

受賞者：40件（うち人命救助に関する功績3件）

### 【表彰式】

開催日：2021年11月29日 於帝国ホテル東京

受賞者には表彰状、副賞として日本財団賞（賞金）を授与する

## 奨励賞

過去に社会貢献者表彰を受賞された方で、引き続き顕著な活動を継続され、使用用途が明確な事業等に対して当財団の運用益から「奨励賞（賞金300万円）」を贈呈

### 【受賞者】

平成23年度受賞者「認定NPO法人3keys」

子どもたちの居場所、ユースセンター「3（さん）」の運営費用

第51回受賞者「NPO法人キッズドア」

子どもたちのインターネット環境を整えるためのWi-Fiルーター等の購入費用

# 受賞者手記目次

---

## 第56回社会貢献者表彰受賞者 40件（敬称略）

田崎 洋介	032
古川 琢也	034
大高 徹	036
NPO 法人シャクナゲ・子供の家	038
NPO 法人マザーハウス	040
赤尾 和美	042
太田 修嗣	044
株式会社ヤナイ	046
NPO 法人こどものちから	048
社会福祉法人茨城いのちの電話	050
防護服支援プロジェクト	052
スランガニ	054
一般財団法人 CHANG アジアの子供財団	056
会食サービス・あじわい	058
認定 NPO 法人プール・ボランティア	060
浅野美幸と JLMM の仲間たち	062
鹿児島市更生保護女性会	064
一般社団法人 Colabo	066
NPO 法人 Seed to Table～ひと・しぜん・くらしつながる～	068
市民グループええじゃん（Asian）	070
NPO 法人 光希屋（家）	072
株式会社レキオス	074
ペシャワール会	076
認定 NPO 法人ぶどうのいえ	078

Gordon Sarah .....	080
NPO 法人女性ネット Saya-Saya .....	082
一般社団法人 WATALIS .....	084
社会福祉法人 AnnBee .....	086
J-SAT Co.,Ltd. ....	088
災害 NGO 結 .....	090
公益社団法人難病の子どもとその家族へ夢を .....	092
認定 NPO 法人カンボジアの健康及び教育と地域を支援する会 .....	094
社会福祉法人慈愛会 慈愛寮 .....	096
NPO 法人ユース・ガーディアン .....	098
公益社団法人 OMOIYARI プロジェクト .....	100
早川 千晶 .....	102
認定 NPO 法人大阪被害者支援アドボカシーセンター .....	104
パゴダの会 .....	106
NGO Udon House .....	108
佐藤 宝倉 .....	110

# 対象となる功績内容

---

- ▶精神的、肉体的な著しい労苦、危険、劣悪な状況に耐え、他に尽くされた功績
- ▶困難な状況の中で黙々と努力し、社会と人間の安寧・幸福のために尽くされた功績
- ▶先駆性、独自性、模範性などを備えた活動により、社会に尽くされた功績
- ▶海の安全や環境保全、山や川などの自然環境や絶滅危惧種などの希少動物の保護に尽くされた功績
- ▶海難、水難、交通事故、遭難等に際し、身命の危険を冒して救助、救援に尽くされた功績
- ▶犯罪等の発生に際し、身命の危険を冒してその解決に協力された功績
- ▶災害、事故、犯罪の発生を未然に防いだ功績

## 田崎 洋介



新潟県

2020年3月18日、出勤時の朝、コンビニエンスストアに立ち寄った田崎さんは、70代くらいの店主から「2階の住居から出火したようなので、消防に通報してほしい」と依頼され携帯電話で通報した。すると店主の妻から、2階へ上がって戻ってこない店主の様子を見て来て欲しいと頼まれ、上がってみると既に煙で前が見えない状態だったので1階へ降りたが、意を決してもう一度2階へ上がった。一層充満していた煙を吸わないようにしていると店主の妻も一緒に階段の上まで来て「あの辺ではないか」と指をさした。その辺りで身をかがめながら手探りで探すと横たわった店主の足が手に当たった。店主を部屋の外に引っ張り出し、抱きかかえて2階から下ろし店の駐車場に運び出した。店主は意識不明だったので、救急車を要請し心臓マッサージを行い、到着した救急車へ引き継いだ。店主は病院で処置を受けて意識を取り戻した。

(推薦者：見附市消防本部)

この度は、社会貢献者表彰式典におきまして大変栄誉ある賞を賜り心からお礼申し上げます。

コロナ禍ではありますが、徹底した感染対策のもと受賞された方々とお会い出来ましたこと感謝申し上げます。憧れの帝国ホテルにて本当に有意義ですばらしい時間を過ごさせていただきました。本当に光栄な夢のようなひとときでした。

安倍会長はじめ社会貢献支援財団の皆様本当にありがとうございました。

2020年3月18日、私は、出勤時の朝に近くのコンビニエンスストアに立ち寄りしました。

すると、店主（70代）から2階の住居から出火したようだとの事ですぐに所持していた携帯電話で消防に通報しました。

電話を切ると店主の妻から通報の間に2階の様子を見に行った店主が戻ってこないと聞き、様子を見に慎重に2階への階段を登っていきました。

既に煙で前が見えない危険な状態であった為一度1階へ降りたものの、顔見知りであった店主を思い、また店主の妻の懇願もありましたので意を決して再度2階への階段を登りました。煙は先程に比べ一層充満していましたが、後ろから店主の妻が指さす方向を煙に注意しながら身をかがめ手探りで探すと、倒れて横たわっている店主の足が幸運にも手に触れました。店主を部屋の外に引っ張り出し、普段では考えられないような力で、大の大人を抱きかかえて2階から降ろし、店の駐車場に運び出すことができました。店主は意識不明でしたので救急車を要請した後に救急車の到着まで心臓マッサージを行い蘇生を試み到着後引き継ぎました。店主はその後病院で処置を受け意識を取り戻したとの事で安堵したのを覚えています。

これは正に2人の運が良くなければ叶わなかった救出劇であったと、今になって思



います。2人とも命を落としかねない状況でした。幸運に恵まれた事に感謝します。

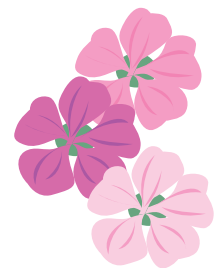
また幸運といえば、この人命救助を表彰して頂けるという有難い機会にも恵まれました。当時はまさかこんな機会に恵まれるとは全く思っておらずお話を頂いた時は大変驚きました。光栄でした。

出席させて頂いた表彰式は本当に素晴らしく、世のため人のためご尽力されている方々の活動内容を拝見し、深く感激致しました。

本当に運が良かった。

どうもありがとうございました。

末筆ですが、社会貢献支援財団及び関係者の皆様方の今後益々の発展とご健勝をお祈り致しまして締めくくらせて頂きます。





# 古川 琢也



佐賀県

2020年8月18日午後3時頃、佐賀市八戸溝1丁目の踏切において、古川琢也さんが自転車で踏切を横断した直後、次の電車が近づき再び遮断機が下り始めた。隣で自転車を押して歩いていたはずの高齢女性の姿が見えないことに気づき振り返ると、遮断機の下りた踏切内で女性は立ち往生していた。踏切には警告音を鳴らしながら電車が近づいていたが、女性は動くことができないようだった。古川さんは自らの危険を顧みず踏切に入り女性と自転車を踏切の外へ救出。救出後3秒ほどで二人の顔を電車が通過した。女性は左半身が不自由であり、遮断機が下りたことでパニックに陥ったとのことだった。古川さんは女性を救出後、名乗らずに立ち去ったが、女性は古川さんの制服を覚えており、高校を探し出して感謝の電話を入れたことで古川さんの功績は知られることとなった。後に佐賀県警察本部長から感謝状が授与され、佐賀県教育委員会からも表彰された。

(推薦者：(公財)警察協会)

このたびは、社会貢献者表彰を賜りまして、誠にありがとうございました。

式典に参加し、受賞された方々の活動を拝聴していると、あらためて世の中には地域や国内、そして世界にわたり人の心に寄り添い様々な支援や取り組みをなされている方がいらっしゃるを知り、驚くとともに大変感銘を受けました。その方々と一緒の場にいることが大変有難く私にとって本当に貴重な財産となりました。

それは、2020年8月18日のことでした。その日は夏休み期間中であつたものの、高校3年生の私は10月の就職試験に向けた事前準備のため朝から学校に行っていました。

準備活動を終え友人と昼食を食べ、その後別れていつもの通学路を自転車をこいで帰っていました。通学路には途中踏切があり、ちょうど遮断機が降りているところでした。私は自転車を押した小柄の高齢の女性と並んで遮断機が上がるのを待っていました。夏の暑い午後3時頃です。

程なく遮断機が上がり、私は自転車をこいで踏切を渡り終わりました。その後、再び警報音が鳴り始めましたが、先程隣で一緒に待っていた高齢の女性が見当たらないことに気づき、後ろを振り返ると既に遮断機が降りており、女性が踏切内で立ちすくんでいました。私は「大丈夫ですか？」と声を掛けましたが、女性は声が出せず無反応だったため、その瞬間『このままだとヤバイ!』と思い自分の自転車を停めて助けに向かいました。無論、警報機を押すことを考えましたが、それでは間に合わないと思い、まず女性が押していた自転車を遮断機の下をくぐらせて外に出し、続いて女性を助け出そうとした時、電車が警笛音を鳴らしながら近づいてきました。しかし、自分でも驚く程冷静な行動で、女性の後ろ側に立ち、出る方向を左手で指し示しながら落ち着いて踏切の外に救出することが出来ました。その3秒後に電車が勢いよく私たちの目の前を通り過ぎ、本当に間一髪で尊い命を救い、また重大な事故を防ぐことが出

来、安堵しました。

電車が通り過ぎた後、自転車のカゴからこぼれ落ちた荷物を拾い女性に渡し体が無事であることを目視で確認し、「じゃあ、僕急いでるんで」と告げその場を立ち去りました。

夏休みが終わり9月の始業式の日、朝のホームルームで担任の先生から「女性の方からこの学校の生徒に踏切内で助けられたがお礼を言いそびれた。との連絡があったが心当たりがある者はいるか」と尋ねられ、内容を聞いてみるとあの時私が助けた高齢女性だと思い手を挙げました。私は名前を告げていませんでしたが、特色ある学校の制服で私が通う学校が分かり連絡をされたようです。

後で分かったことですが、女性は左半身が不自由で遮断機が降りたことでパニックに陥ったとのことで、さぞ怖かっただろうなと思いました。

この救出については、後に佐賀県警察本部長から感謝状をいただき、また、佐賀県教育委員会からも表彰をいただきました。私は目の前にある命を救い出すことに一生懸命で、まさかこんなに表彰していただけるとは夢にも思いませんでした。今後も命の尊さを思い噛み締めて、命を救い、守り、繋げていくべく一日一日を丁寧に送りたいと思います。



▲救出現場



▲表彰状 佐賀県教育委員会



▲感謝状 佐賀県警察本部長

# 大高 徹



神奈川県

2020年4月1日、午前3時35分頃、横須賀市森崎の実家で就寝中だった大高徹さんは、近所の住宅火災に気付いた妹の香さんに起こされ、急いで出火元の住宅に向かった。出火元の住宅の2階のベランダで高齢女性が「助けてください」と叫ぶ声を聞き、走って自宅へ戻り梯子を取ってくると、ベランダに掛け登って行ったが、建物のあちこちから煙が出ており、想像よりはるかに熱かった。火の勢いがやや弱そうな方へ女性に移動してもらい、梯子を掛け直して香さんに支えてもらって登り、柵を越えるように女性に声を掛けたが、高さのある柵を女性は乗り越えられなかったため、大高さんが柵を乗り越えベランダに降り、女性が柵を越えるのを手伝った。「足が着かない。怖い」という女性を励ましながら、女性が落下しないよう、女性の背中を覆うような体勢で梯子を降り救出した。救出後、ベランダの窓から火炎が噴出した。1階に女性の夫にあたる高齢男性がいることがわかり、大高さんは救助に向かったが、玄関は施錠され、雨戸は簡単に外すことが出来ず、到着した消防隊の搜索で男性は遺体で発見された。

(推薦者：横須賀市長 上地 克明)

この度は、栄誉ある社会貢献者表彰を賜りまして、社会貢献支援財団の皆様、ご推薦頂きました横須賀市長様他、本事業に関わっている皆様本当に感謝申し上げます。

今回表彰を賜ることになった火災で、多くの皆様にお褒めの言葉を頂きましたが、私としましては当たり前のことをさせて頂いただけで、助けられずにご主人様が亡くなったことが残念でなりません。

今でも助ける手立てがなかったか、考えることがあります。

火災でお亡くなりになったご主人様のご冥福をお祈りするとともに、その後の奥様の幸せを願っております。

実家に帰省していた時のことでしたが、無事に助け出すことが出来たのは、両親が丈夫な体で産んでしっかり育ててくれたこと、日頃から家事育児を頑張って家庭を守ってくれている妻、かわいい子どもたちがいてくれたからです。みんなに感謝しております。

また、被災した奥様が助けてと大きな声で私たちに声掛けいただいたのも、私には大きな力を与えてくれました。救助を手伝ってくれた妹が一緒にいてくれたのも心強いものでした。幼いころからお世話になった近所の方を助けられたことで、少しでも恩返しになっていれぱうれしく思います。

火災の後、横須賀市長様と消防所長様とお会いする機会を頂き、火災時の一酸化炭素の恐ろしさを教えて頂きました。無色・無臭で、その存在が感知しにくい気体で強い毒性を有しているそうです。

ほんの数回呼吸するだけで、人によっては意識を失い、命を落とすそうです。

二度と、火災の独特な煙の嫌な臭いや、ものすごい熱さは、経験したくないです。



皆様もくれぐれも火災には、ご注意ください  
頂きたいと思います。

最後になりますが、社会貢献者表彰  
式典では、大変お世話になりました。

受賞者の皆様とお話する中で、たく  
さんの方々が日本や世界において活躍  
されていることを知り、私にとって大  
変有意義な時間となりました。

社会貢献されている皆様の活動が大  
きくなり、世界がより良い社会になる  
ことを、微力ながら応援させて頂きた  
いと思います。

今は、人生をかけて社会貢献されて  
いる方々には遠く及びませんが、私も  
人生を今一度考え、受賞者として少  
しでも多くの社会貢献ができるよう、頑  
張っていこうと思います。

本当にありがとうございました。



▲横須賀市長感謝状





# NPO 法人シャクナゲ・子供の家



兵庫県

1992年にネパールでの学資支援活動からスタートした活動だったが、現地の貧しい子どもの日常、過重労働に明け暮れ、インドに連れていかれ性産業の餌食となる少女の姿を知り「学資を出せば子どもの未来は明るい」と考えていた甘さに愕然とし、なにより落ち着いて勉強ができる環境整備が必要と考えた。それからは、子どもたちを守り育てるための居住施設の建設へと舵を切った。1999年には法人化し、2002年には首都カトマンズ郊外に、孤児らが生活できる部屋を借り、女子向けの2階建て自立支援施設「サハラ子供の家」を設置した。現地NGOが共同で運営にあたり、5歳～17歳の子どもが、安心して安全な環境のもと、学習に専念ができ、卒業資格を得て、就職に結びつくことができるようにしている。

(推薦者：佐治 文隆)

代表代理

青井 百合子

ユニセフ子どもの権利条約にある「すべての子どもの命が守られ、もって生まれた能力を十分に伸ばして成長できるよう、医療、教育、生活への支援などを受けることが保障されます」という理念に私共は賛同し、この30年間その理念を軸に、ネパールのカトマンズにおいて、孤児（女子）を守り育てる「サハラ子供の家」の運営を継続しております。またネパールの困窮する母子の経済的支援をするために、特産品の開発及び製作指導を行っております。

尚、事務局のある西宮市の小学校においては、本の読み語り及び朗読劇を開催し、子どもたちの傍らに物語の世界を共に楽しんでおります。現在における日本の子どもを取り巻く環境は、少子化、核家族化により親が地域の人と接する機会が減り、貧困、いじめ、虐待、ひきこもり等々を見えなくしていると聞き及びます。マスコミが報道する問題は、私共の目の前にある、又、足元に転がっているような身近な問題で他人事ではありません。私共は、これらの子どもをめぐる問題を乗り越える糸口として、作家・野坂昭如氏の西宮での戦時体験を描いた「火垂るの墓」の朗読劇を催しながら、地域の子どもたちや大人たちと希薄になった関係を改めて取り戻したいと念じております。

私共の力は心もとないものですが、互いの力を持ちよって活動を継続して参ります。

代表 田中 裕子



▲ネパール震災復興支援（通年）



▲ネパール特産品の展示とバザー  
（5月25日、8月24日、11月4日・17日、12月1日）



▲ネパールサハラ子供の家訪問（2019年3月12日～16日）



▲市内小学校、公民館にて読み語りライブ  
（10月25日・28日ほか）



▲朗読劇「火垂るの墓」の上演（10月28日）



# NPO 法人マザーハウス



理事長  
**五十嵐 弘志**

東京都

元受刑者の五十嵐弘志さんは、受刑者や元受刑者等の支援をするために2012年4月、民間非営利団体マザーハウスを設立。2年後の2014年5月にNPO法人マザーハウスとなる。主に少年院・刑務所にいる人たちの更生改善・社会復帰支援を行っており、受刑者の多くは孤独で、自分と向き合うことができず自暴自棄になっていることから、活動の一つとして受刑者と文通をするプロジェクト「ラブレタープロジェクト」を実施している。全国の約800名の受刑者と約250名の文通ボランティアが交流して、健全な心のふれあいを取り戻すことで再犯を防止することを目指す。元受刑者には、社会とのつながりや人との交わりが重要だと感じ、出所後の生活支援等を中心に、生活保護の申請・住む家探し等の手続きや社会復帰と自立に向けてジョブトレーニングとして「マリアコーヒー」の製造・販売、「便利屋サービス」で引っ越し・不用品処理等を実施し出所者が自分と向き合い、健全な社会生活を送れるように支援を続けている。

(推薦者：中谷 こずえ)

当法人は、2012年4月8日に民間非営利団体マザーハウスとして、元受刑者の当事者である私が、元受刑者・出所者等を支援するために設立しました。2014年5月に晴れてNPO化を果たしました。

マザーハウスは、主に少年院・刑務所にいる人たちの更生改善・社会復帰支援をしています。それは、私自身、刑務所で受刑生活を送っていた中で24時間、ボランティアで高齢者・障がい者・認知症等の受刑者の介護をしてきた経験に基づきます。

多くの受刑者が孤独であり、自分と向き合うことができず、自暴自棄になっている方が多いです。そして、多くの受刑者が心に傷を持っており、人の愛を知りません。その中で、社会とのつながりと人との交わりがとても重要であると感じました。

そして、当事者がお互いに共に生きていくことが更生するのに役立つと思ったのです。なぜなら、当事者だから、同じ体験をしたことがある人だから、お互いが見えてくることがあります。当事者が当事者をサポートし、それを社会の人が支援する組織を作りたいと思い、このマザーハウスを立ち上げました。

私は受刑中、文通者との手紙を通して自分が愛されており、大事にされており、大切にされていることを感じることができました。文通を通して、犯罪被害者の母親とも出逢い、被害者について、償いについて、真剣に考えることができました。

自分と出逢い、悔い改めるには人との交わりと愛が必要です。更生は、自分一人では難しいと思います。なぜなら、更生は社会の中で人との交わりを通してできることだからです。

受刑中の文通で生きた愛に触れ、自分と出逢い、真剣に悔い改めた人は必ず更生できます。なぜなら、自分が愛されていることを実感でき、体験しているから人を大切に



に、大事にできるからです。社会とのつながり、人とのつながりにより、生きた愛と触れ合うことができるから変われると私は思います。

マザーハウスは今後とも文通を通して受刑者たちと触れ合い、心と心の交流を通して生きた愛に触れていただき、社会復帰してからも様々なサポートをし、共に今を生きていきたいと思っています。

社会貢献支援財団からの受賞を契機にもっと社会の人たちに活動を知って頂きたい、啓発活動に力を入れていきたいと思っています。特に中学、高校、大学の学生に話をして同じ人間であること、愛の反対は無関心であること、被害者・加害者として対立するのではなく、対話を通して同じ社会の中で共に生きることを目指していきたいです。

理事長 五十嵐 弘志



▲慰問に来た Paix<sup>2</sup> (ベベ) の二人と対談



▲犯罪社会学会でのシンポジウム-長期受刑者が体験談を語る



▲対談 犯罪者の回復と裁判の問題について



▲更生保護女性会ブースでコーヒー販売



▲来日したローマ教皇フランシスコ



## 赤尾 和美



フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPAN 代表

### ラオス

日本で看護師免許取得し臨床経験をした後、アメリカ合衆国ハワイ州看護師免許を取得。ハワイ州のHIV専門団体等でHIV/AIDS予防教育担当・看護師として勤務。1999年、恩師にカンボジアのシェムリアップにあるアンコール小児病院でのボランティアを勧められ、看護師として2ヵ月従事し、2000年からは看護指導者として正式に着任。当初、医療態勢も人材も不足していた状況で、医療のスキルや知識はもとより、人を「見る」ということの意味や命をどのようにとらえるかという倫理も含めた教育を手掛け、常に「学ぶ」ということを実施。看護教育のほか院内のHIV感染症対策にも着手。その過程で、通院が困難な地域や家庭への訪問看護を始め、2004年、訪問看護部を院内に設立し、病院で治療後のフォローアップとサポートを提供する体制を整えた。2013年からはラオ・フレンズ小児病院の立ち上げに関わり、2015年の開院以降現在に至るまで、カンボジアでの経験をもとに、HIVと訪問看護の活動を通して看護教育に携わる。現在、栄養失調、脳性麻痺、HIV感染症、整形外科疾患等の患者の家庭へ訪問看護を行っている。院内では、マネジメントとアウトリーチプログラムディレクターとして活動し、2016年よりフレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPAN代表を兼任している。

(推薦者：岩田 亮子)

この度は荣誉ある賞をいただきましたこと、とても感激しております。ラオスからの帰国ならず、授賞式には伺えずに残念でした。

ふとした事がきっかけで全く想像もしなかった途上国の小児医療に20年以上も関わることになりました。今や人生の大半を占める経験となり自分でも驚くばかりです。今回の受賞を機に最初にカンボジアに降り立った当時のことを思い出しました。週に数回しか飛ばないタイからの飛行機で乗客は2人のみ。到着後、荷物は空港職員から手渡しと驚くことばかり。今は10分もあれば到着する空港から病院までの道のりは、ガタゴト道を車で40分の道中で、全てが興味津々、とにかく刺激的でした。未知の世界であったカンボジアでの生活がじわじわと身体に染み込んでいく感覚、また、当時のワクワクや戸惑いの感情も、つい昨日のこのように蘇ってきました。そして、この20数年の経験は、あの初カンボジア上陸時の衝撃と日々の活動の中から湧き上がってくる“快感”がなければ続けられなかったことだと実感しています。

何をするにも“大変”な日常を送りながら、医療の現場ではそれまでの当然が当然ではない現実と直面し、自分に何ができるのだろうかかと悩み気が付いたことは、“当然を作ろうとするから行き詰まるのだ”ということでした。自分の物差しを無理やり使おうとしないということです。とはいうものの、頑固な私はその壁に躓くことは多々ありました。それゆえに、何かを成し遂げた時の達成感と快感は格別なものでした。この快感を追い求め、あっという間に10数年。外国人の長居は無用ですから責任を全てカンボジア人へ引き渡し、活動の地をラオスへと移すことになりました。

ラオスでは、カンボジアの時のようにドキドキするようなことはないものの、“目から鱗”なことがたくさんあります（今も進行形です）。カンボジアとラオスは同じような国だろうと思ひ込んだことがその原因でした。国が違えば人も文化も医療も違う。分かりきっていたことを改めて認識し、“異文化・異医療”、“人を看る”ということを実感した次第です。

これまで私は現地スタッフに“教える”立場であるはずですが、完全に“教わる”方が多かったと感じています。未知の世界へ導いてくれた今の活動に今後どれくらい関わられるのか、これもまた未知です。ただ、私のやりたいことがまだあるなど感じているうちは続けているのだらうと思います。





## 太田 修嗣



認定 NPO 法人くるみ-来未  
理事長

神奈川県

大学を卒業後、1999年にキヤノン株式会社に就職。2003年にドイツへ赴任するも、当時4歳の長男が知的障害/自閉症の診断を受ける。慣れない異国での生活に多くの困難を経験し、2008年の帰国と同時にシングルファーザーとなり、川崎市で父子での生活を始める。会社員生活を送りながら多くの支援が必要だった長男の為に寝る間も惜しんで奔走する中、行政や福祉サービスに頼るだけではいけないと2014年にNPO法人くるみ-来未を設立する。親子で参加できるお弁当づくりを行うなど当事者親子だけでは実現しづらいことを支援者の力も借りて実施。また、発達障害の啓発講座など広く一般市民に向けた事業活動にも力を入れ、インクルーシブな地域社会づくりのため試行錯誤している。2020年2月には地域の居場所「シェアリングハウス・くるみのおうち」を総勢120人の仲間とともにDIYで完成させる。コロナ禍もあり困り感が増している当事者・家族の居場所として、人数を限定し「みんなでカレーを食べる会」等を定期開催している。2021年6月、事業内容と運営体制が適切であることが認められ、川崎市より認定を受ける。勤め先のキヤノンでは管理職に昇進。長男は今年成人を迎え、豊かな地域生活を実現するため親子の奮闘は続く。

(推薦者：磯 尚子)

大学を卒業後、1999年にキヤノン株式会社に就職。2003年にドイツへ赴任後、当時4歳の長男が知的障害/自閉症の診断を受ける。慣れない異国での生活で多くの困難と家庭内の混乱を経験。2008年の帰国と同時にシングルファーザーとなり、川崎市での父子生活が始まる。

息子は地域の小学校の特別支援学級に通学するも、自閉症の特性に加えて環境や習慣の変化により当初は通学さえままならない日々を送っていた。多くの支援が必要だった息子のために寝る間も惜しんで奔走するが、息子との地域生活を送る中で、居場所がない、いじめに遭う等の困難に直面し、学校や福祉サービス、行政等に頼るだけでは問題は解決しないと思に至る。そこで、2014年にNPO法人くるみ-来未を設立し、親子が参加しやすいイベント（お弁当づくり、アウトドアクッキング）を行うなど当事者親子だけでは実現しづらいことを支援者の力も借りて実施。また、発達障害の啓発講座など一般市民に向けた事業活動にも力を入れ、誰もが暮らしやすい社会づくりのため試行錯誤を続けている。

2020年2月には、川崎市中原区において地域の居場所「くるみのおうち」を120人の仲間とともにDIYで完成させる。しかし、その後のコロナ禍により息子の日常生活は大きな影響を受ける。こだわりが強くなったことで家庭への負担が重くのしかかり、その状態が今でも続いている。他の多くの障害児者家庭もコロナ禍による影響を受けており、日常生活の混乱、家庭内暴力や虐待の増加、社会的孤立、休職や離職等、深刻な事態に直面している。そのような状況にある家族がほんの少しの時間でもホッ



とできるよう「みんなでカレーを食べる会」等のイベントや活動を月2回ほどのペースで開催。2021年6月には事業内容と運営体制が適切であることが認められ、川崎市より認定を受ける。

今後の展望は、「くるみのおうち」を起点に「インクルーシブな社会づくり」の担い手を育てる事業活動に力を入れる。これにより、学校・会社・地域など様々な場面において、障害のある人が地域で豊かに生きることができ、親が「この子を育てることができてよかった」と思えるような社会を創ることが目標である。

自身はキヤノン株式会社で管理職に昇進。息子は特別支援学校高等部を卒業、福祉事業所に通所して3年目。今年1月には成人式を迎えた。コロナ禍による混乱は現在も続いているが、多くの人たちに支えてもらいながら、息子が豊かな地域生活を送ることができるよう奮闘している。

認定 NPO 法人くるみ-来未 理事長/  
キヤノン株式会社

デジタルプリンティング事業本部 主幹



▲親子でお芋堀り 2020年11月



▲お弁当づくりイベントにて 息子と二人で調理中  
2016年7月3日



▲音楽イベントにて 2017年9月10日



▲くるみのおうち DIYでの集合写真 2019年6月



▲青年たちとの食事づくり 2017年11月



# 株式会社ヤナイ



常務取締役  
柳井 春花

## 福岡県

2011年9月末をもって北九州市門司区の青浜、太刀浦の2地区の路線バスの運行がこの地域の過疎化により廃止された。当時、青浜地区には32世帯、太刀浦地区には40世帯の家族が生活しており、廃止の影響で同地区の住民は最寄りのバス停まで0.6キロ～2キロ程度の距離を歩くことを余儀なくされ、行政による送迎バスの試験運行も行われたが、2012年9月に終了。近郊の株式会社ヤナイ（柳井忠春社長（当時））がその話を聞き、地元の役に立つことがあればと、2012年7月1日より自社の中型車を使用し、青浜～白野江、太刀浦～田ノ浦の各JR門司港駅、市街地へ向かう最寄りのバス停までの路線バスが廃止になったエリアをカバーする無料バスの運行をボランティアで始めた。送迎バス運行開始当初の1日10便を地域住民の増便の要望を受け、現在は1日16便の運行を行っている。運行日は毎週月曜日～土曜日までの週6日（祝祭日・正月・お盆を除く）、運行時間は始発が7時35分、最終は16時50分。多い日には1日に、約20名が利用。運行開始から現在に至るまで9年間変わることなく実施している。

（推薦者：有光 武元）

この度は第56回社会貢献者表彰を受賞させて頂きまして誠にありがとうございます。心より御礼申し上げます。

弊社は、福岡県北九州市門司区にて採石業を営み、主に港湾土木工事で使用する石材を製造販売いたしております。日頃は石材の採掘や積み出し等の事業活動において地域の方々に大変お世話になっております。弊社は今年で創業76年を迎えます。

北九州市は政令指定都市の中でも高齢化が最も進んでいる市であり、過疎化とも相まって、2011年9月に路線バスの運行が、地元の青浜地区並びに太刀浦（たちのうら）地区において廃止されました。当時、青浜地区には32世帯、太刀浦地区には40世帯の住民が生活されており、廃止の影響により最寄りのバス停まで遠くなり、約2キロの距離を歩くことを余儀なくされました。そのため、行政による送迎バスの試験運行も行われましたが、2012年9月に終了してしまいました。

当時、弊社の社長 柳井忠春（現 ヤナイホールディングス(株) 社長）が、その現状を聞くにあたり、地元住民の方々のお役に立つことがあればと、2012年7月より社有車（8人乗り）を使用し、青浜地区と太刀浦地区から買い物、通院、通勤や通学のための送迎バスの運行をボランティアで始めました。

送迎バスの運行開始当初は1日10便でしたが、地元のご要望を聞き9年経った今では1日16便の運行を行っております。運行日は毎週月曜日～土曜日までの週6日（祝祭日・正月・お盆は除く）、運行時間は始発が7：35、最終は16：50です。多い日には1日20名のほどの方に利用していただいております。

開始から9年経過いたしました。毎日、地元の方々の笑顔に支えられて送迎バスを運行しております。これからもお世話になっております地元の方々に少しでもお役に



立てればと思います。

第56回社会貢献者表彰を励みに、これからも地域の社会貢献活動に尽力して参りたいと思います。

常務取締役 柳井 春花



▲始発は7時35分です



▲乗車のお手伝い



▲地元の方々の笑顔に支えられています



# NPO 法人こどものちから



理事長  
井上 るみ子

東京都

2013年、小児がんの子どもをきょうだいを応援する団体として設立。活動の場所は、国立がん研究センター中央病院小児病棟の待合室。ここは全国から難治性の小児がんの子どもに付き添って訪れるきょうだいや親たちのための空間。ボランティアがおもちゃや遊具の除菌や整理を行い、きょうだいの託児や遊び相手をしている。アメリカでは子どもの入院に対して必ずきょうだいのサポートが含まれ、病院等で様々な取り組みが展開されているが、日本ではきょうだいに対する公的な支援はほとんどなく、ボランティアに依存している。小児病棟では親の面会時、感染症予防のため小学生以下のきょうだいは病棟に入れられないため、ひとりで何時間も待たされていて、親は病児の面会に集中できない。このような状況が「こどものちから」の活動によって、子どもや親の心にゆとりができる存在となる一方で、待合室活動を利用した親の中には退院後、地域の病院で同様の活動を始めた人もいるほど。「人のいる待合室」は、きょうだいと遊びながら病児と家族を支える場やきょうだい同士を繋ぐ場、育児相談の場、時には死に直面するきょうだいを支える場として必要な場所である。閉鎖的な日本の病院に「人のいる待合室」が広まるように活動を継続している。

(推薦者：坂上 和子)

このたびは「社会貢献者表彰」をいただきありがとうございました。

前日の懇親会では、一緒に受賞された方々の素晴らしい活動を紹介され、日本人であることを誇らしく感じました。その中に入れていただけましたことを光栄に存じます。そして身の引き締まる思いがしました。またご推薦くださった「認定NPO法人病気の子ども支援ネット 遊びのボランティア」理事長の坂上和子さんに深く感謝申し上げます。

24年前、三男が小児がんに罹患したのが活動を始めるきっかけでした。この事態を家族で乗り越えようと、私は病児以外の3人の子どもたちに全てを話し、彼らは理解して協力してくれていると思っていました。ところが9ヶ月後に病児が他界すると、3人の子どもたちは理解していないどころか、深く傷ついていたことを知りました。お互いを理解し、話し合えるようになるまでには、とても長い時間がかかりました。

病児が他界した後も親の会に所属し、同じような家族と関わりました。家族相談士という民間資格を取得後、長女の提案で小児待合室での活動を6年間、1人で実施しました。巡り逢った子どもたちは、病児もきょうだいも皆それぞれにがんばっていました。親の会を離れ、安定した活動を目指し、2013年にNPO法人こどものちからを立ち上げると、賛同者も増え、活動回数や時間を増やすことができるようになり、利



▲ある日の待合室  
「活動のお知らせ」  
入口の看板



▲ある日の待合室「オンライン病棟訪問」  
2021年6月から病棟師長の依頼を受けて、貸し会議室からの「お話し会と工作」を月1回始めました。





用者も増えました。ボランティアとして活動に参加してくれる人も増えました。新型コロナウイルス感染症で活動休止になる前の2019年度では、延べ600名の病児やきょうだいに遊んでもらうことが出来ました。

ここでは、子どもたちは安全に整えられた安心出来る空間で、伸び伸びと自分を表現することが出来ます。溜まったエネルギーを発散したり、時には抱え込んでいる不安なことや嫌な出来事を私たちに話してくれたりすることもあります。私たちの役割は、子どもが子どもらしくいられるように遊びを通して関わることだと思っています。

病院内での対面活動は現在も休止ですが、今年度は小児病棟師長の依頼を受け、オンライン病棟訪問を月に一度実施しています。画面越しでも子どもたちに逢えるのは嬉しいです。新型コロナウイルス感染症が収束して、活動が再開されたら、溜まった疲れを少しでも癒やせるように、より充実した活動につなげていきたいと思います。受賞にあたり、温かいお心遣いを含め、たくさんのご褒美をいただき「これからもがんばろう」と思いました。ありがとうございました。 井上 るみ子

このたびは「社会貢献者表彰」という大きな賞をいただきまして誠にありがとうございました。前日の懇親会や授賞式を通して皆様の素晴らしい活動のお話を伺うことができ、とても心強く感じました。

私がこの活動に参加したのは8年前です。

息子を小児がんで亡くし、3人のきょうだいを深く傷つけてしまった代表自身の辛い経験を通して、きょうだい支援の必要性を感じ、どうしても実現させたいと説得されました。そしてその熱意に深く共感し、スタッフとして活動することになりました。私自身、ゼロからのスタートでした。8年間、小児病棟の待合室できょうだいや病児と遊びながら、子どもたちが抱える不安や寂しさ、親御さんが抱えている不安や悩みなどに少しずつ寄り添うことができるようになりました。それと同時に自分のまわりにも、成人したきょうだいが心に傷を抱えたまま生活していることにも気づきました。この活動をしていなかったら、全く気づかずにいたでしょう。改めて「きょうだい支援」の重要性を実感しました。これからも地道に長く、この活動を続けていきたいと思っています。

「こどものちから」にとって、このたびの受賞はとても大きな力になりました。

そしてこの2日間、スタッフの皆様の温かいお心遣いに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

松本 待子



▲ある日の待合室  
「ぼくのお城」  
退屈な病棟から抜け出して、紙コップでお城を作りました。



▲ある日の待合室 『あのね』の話  
きょうだいさん（兄）とボランティアのお兄さん



▲ある日の待合室 『月に一度の工作の日』  
やりたい時にやりたいことを（^▽^）

# 社会福祉法人茨城いのちの電話



理事長  
幡谷 浩史

茨城県

1980年代に茨城県筑波研究学園都市が整備された一方で、研究者の相次ぐ自殺が大きな問題となり、1985年、つくば市に茨城いのちの電話を開局。当初は12時から20時の8時間受信体制だったが、社会からの要請が高く1991年から24時間365日受信体制で行っている。翌年、水戸市にも電話相談室を開設。相談員は、自費で養成講座を受講し約2年間専門的な研修を受けて資格を取得する。活動の拡大、充実に伴い、相談件数は増加しピーク時は年間3万件を超えたが、近年は2018年（19,688件）、2019年（18,570件）と減っている。相談員も高齢化などで減少しているため繋がらない電話にならないように相談員を増やすように啓発を行っている。利用者は30代から50代が多く、10代・20代の若年者からの利用が少ないことが課題となっていた。若年者は電話よりもSNSを利用することが多いのでLINE相談を導入することになり、クラウドファンディングで資金を集め、2021年5月からLINE相談を始めた。36年にわたり活動を継続している。

（推薦者：中込 四郎）

第56回社会貢献者表彰をいただきありがとうございました。大変名誉ある賞をいただけたことは光栄なことであり、これからの活動への励みとなります。これまでの活動を認めて下さったことに改めて感謝申し上げます。我々の活動は相談員の個人名を出さないボランティア活動ですので、相談員それぞれ報われた思いを抱いております。

この活動を支えているのは、皆様の会費・寄付および助成金・補助金です。皆様の温かいご支援があればこそ、開局以来36年間継続して活動を続けることができました。これこそ奇跡的なこととありがたく思います。

茨城いのちの電話は、自殺予防を目的に開局いたしました。心の危機にある方の悩みに寄り添い、良き隣人としてお話を伺っています。相談者も、相談を受ける相談員も匿名で行います。人に話すことふれあうことで、心が少しでも軽くなり、「今日もう少し頑張ってみよう、生きてみよう」というお気持ちになればと、相談員はお話を伺っています。

いのちの電話は全国に50センターあり、それぞれが独立しての活動ですが、センター同士での助け合いも行っております。全国のセンターが協力し合い、毎月10日（8時～翌8時）と毎日16時～18時にはフリーダイヤルでも相談電話を受けています。

茨城では365日24時間眠らぬダイヤルとして相談活動を続けてきましたが、現在はコロナ禍のため活動を縮小せざるを得ない状況です。電話の呼び出し音は途切れることなく、受話器を置くとすぐにまた次の電話がかかり、相談者の方にはいつも話中でつながりにくいことでご迷惑をおかけし申し訳なく思っています。それだけ多くの方々が必要とされているという実感と、今後の改善策の必要性を感じています。

相談活動のほかに、公開講座を実施して一般の方々へ自殺予防啓発活動も行ってい



ます。また今の若者は、電話より SNS の方が使いやすいということで、LINE 相談を本年度 5 月 30 日より開始いたしました。電話という手段が生まれたことにより電話相談が始まり、SNS が生まれたことで SNS 相談ができるようになりました。電話だけでなく様々な社会の変化に対応できるように活動していくことも大切と考えます。その中でいのちの電話らしさを生かした相談活動をこれからも続けていきたいと思えます。今後とも皆様のご理解とご支援をいただければ大変うれしく存じます。

事務局長 多田 博子



▲パンフレット



▲バザー風景



▲電話相談員養成講座 開講式



▲LINE 相談



▲電話相談室



# 防護服支援プロジェクト



共同代表  
小野寺 紀子

東京都

新型コロナウイルスが蔓延する2020年4月19日、東京都済生会中央病院（以下済生会）から防護服が不足していると相談を受けた菌部喜史さんは知人の新健一さんに相談。新さんは気仙沼市の女性団体「気仙沼つばき会」の小野寺紀子さんに相談すると、つばき会は気仙沼市民に声をかけ、東日本大震災でお世話になった恩返しにと簡易防護服づくりを始めることとなった。4月22日に任意団体として活動することを決め、東京に本部と事務局、気仙沼にも事務局を置いた。この間、菌部さんは済生会と共に防護服の仕様を決め、作り方の動画と型紙をウェブサイトに掲載した。新さんは資材の選定と調達、寄付金の募集を行った。4月27日には300着を済生会に届け、この活動が新聞やテレビ、SNSなどを通じ瞬く間に全国広がって、全国から製作ボランティア、寄付金の協力の申し出があった。防護服は70ℓの業務用ポリ袋と養生テープで製作するが、検証を重ね着やすく、安全に脱ぎやすいものに改良されていった。2021年10月1日時点で、120,000着以上を全国397の医療機関や医師会、高齢者施設へ届けることができた。

（推薦者：井口 加代子）

「東京都済生会中央病院の防護服の備蓄が底をつく恐れがあり、看護師や事務員に加えて患者までが総出で手作りしている。誰か防護服を作って、病院を助けてもらえないか？」緊急事態宣言下の2020年4月19日、深夜にかかってきた1本の電話から防護服支援プロジェクトは始まりました。

第一報の翌日から数名で枠組みを決め、東日本大震災の被災地である気仙沼の多くの市民が立ち上がってくれて、4月27日には最初の300着を届けることができました。短期間に製作仕様の決定、適した資材の選定・調達、寄付金の募集、ホームページの立上げ等を進め、地元紙、全国紙、テレビ局などが取り上げてくれたこともあって、この活動はあっという間に全国に広がりました。1,000人以上の製作ボランティアと多くの寄付者の助けもあって現在も活動を続けることができ、これまでに約13万着の防護服を全国の医療機関・高齢者施設などに無料でお届けしてきました。活動を始めた当初には想像もできなかった大きな活動となりました。

気仙沼の方々は震災後に多くの方から支援を受けたことへの恩返しという気持ちもあったそうですが、実は済生会も気仙沼に医療チームを派遣していたことが途中でわかりました。

新型コロナウイルス感染症という未知の疫病との戦いにおいて、医療従事者・医療体制を守り、感染の危険性の高い高齢者や障がい者をはじめとする日本国民を守るという大義があればこそ、大勢の人々が集まり、不可能だと思われた事が次から次へと実現したと感じています。

また、自分のためではなく、他人のために頑張るという一人一人の意識が、プロジェクトを推進する上での最大の原動力であったように思います。



個人やグループに加えて、学校や企業単位での製作ボランティアとしての参加希望が次々と増えましたが、防護服作りに参加して下さった多くの方々は、防護服を作りながら他人を助けるという活動に参加できた喜びを伝えてくれました。また、緊急で立ち上げた任意団体であるにも関わらず、全国多くの個人や企業が資材購入等の経費を賄うための寄付をしてくださったことも感謝の念に堪えません。

今回の賞は、このプロジェクトに関わった全ての方々が頂戴したものと思っておりますが、困っている他者を助けるという尊い活動に喜びを感じるという実体験をした多くの人たちが、現代の日本における助け合いの在り方について考えるきっかけになってくれることを願い、コロナ禍を乗り切ることができるまで、出来る限り支援活動を継続していきたいと思っております。

共同代表 菌部 喜史



▲2020年4月 気仙沼事務局 プロジェクトスタート時の様子



▲よしかわ耳鼻咽喉科の吉川先生 簡易防護服ご着用の様子



▲2020年7月 企業参加への作り方講習  
(ピツニーボウズジャパン様)

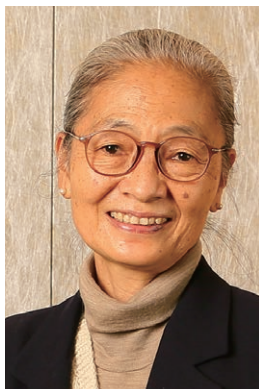


▲2021年7月 東京都大妻中野中高 防護服製作の様子



▲2020年11月 気仙沼事務局の様子

# スランガニ



代表  
馬場 繁子

## スリランカ

スリランカは南アジアで最も高い識字率を誇っているが、貧しい家庭の子どもたちは学びの環境を整えることが困難である。スラム街で自宅の一部を開放し、無料で子どもたちに読み書きを教えていた、当時20歳ほどのスランガニさんと出会った馬場繁子さんは、1992年、幼稚園と地域の幼児教育支援のためにスランガニを設立。スリランカでは幼稚園の8割以上が個人経営で、園同士の繋がりは希薄、個々により子どもたちの学びの環境が違っていたため、個々の幼稚園をいくつかの小グループに分けグループごとに集めてワークショップを行い、先生たちの情報交換のためのネットワーク作りを始めた。今ではスリランカ各地で園が小グループを作り、約400の園で先生間のネットワークができて、地区の先生たちを介して支援が行われている。支援をはじめてもうすぐ30年を迎えるが、貧しい家庭の子どもたちの教育支援のほか、障がいを持つ子どもたちの通所センター、自立支援のための食品加工所、子どもたちが自由に楽しく絵本に触れる環境を作り、家庭へと広げる絵本箱プロジェクトなど幅を広げて支援活動を続けている。

(推薦者：(福)地蔵会 紙好き工房 空と海)

スランガニは、スリランカのこどもたちの、学びの環境向上のための事業を実施しているスリランカ政府登録のNGOです。

幼稚園の支援活動から始まり、保育士への研修、グループ作り、トイレ、手洗いなど衛生環境改善、絵本箱配布／絵本出版、栄養指導、貧しい家庭の子どもたちへの教育支援、障がい児通所センターの運営など、30年の間に様々な角度から子どもを取り巻く学びの環境改善のためのプロジェクトに取り組みました。

今から34年前に、私は青年海外協力隊、幼児教育隊員としてスリランカに派遣されました。帰国後、日本の人々の優しい思いを集め、スランガニを始めました。今年で30年になります。

ここまで夢中に活動に没頭することができましたのも、スリランカのスタッフ始め、多くの方々のご支援とお導きのおかげです。

誠実に一人一人を思いやるという、スランガニの取り組み方。自分たちも成長していくことのできる環境のなかで育ったスタッフたち。スランガニはとても小さな団体ですが、スリランカで最強のチームだと自負しています。困難なことがあっても、時間をかけても、なんとかやり遂げる、その底力には驚くことがあります。そのチームの一人である私は大変幸せです。

草の根で人々とともに熱心に仕事をしているスタッフは、この受賞を心から喜んでくれました。オンラインで配信してくださった画像を同時に見ながら、自分たちも同席していたかのように喜び、メッセージを届けてくれました。

いままで支えてくださった方々に深くお礼を申し上げますと共に、これからも今までと同じように、志を高く持ち、まっすぐに、日々の活動を続けていきます。スランガ



この小さな輪が、ゆっくりと美しく広がり、その波紋が関わった方すべてに広がりますように、そして笑顔になれますようにと祈ります。

この度、貴財団より社会貢献者表彰をいただきましたこと、心からお礼を申し上げます。最後になりましたが、私たちが推薦してくださった、「空と海」の大野待子様にも心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

代表 馬場 繁子



▲絵本研修会（研修会事業）



▲お話タイム（リトルトゥリー障がい児通所センター）



▲保育士研修会（研修会事業）



▲幼稚園訪問



▲食品加工訓練所のこどもたち（リトルトゥリー障がい児通所センター）

# 一般財団法人 CHANG アジアの子供財団



会 長  
斉藤 興仁

埼玉県

タイのプロボクサーだった代表の斉藤興仁さんが、タイでは捨て子や虐待から孤児院で生活している子がとても多いことを知り、寄付と交流を始めた。更に周辺国では、スラムや貧困家庭のもっと過酷な現状を目の当たりにした。そこで、この子たちが幼い命を落とすことがなく、美しい夢に向かえるよう、生活と教育を支援することで、将来の自立を実現させることを目的に団体を設立。現在はカンボジアのスラムで、孤児院、幼稚園、学習塾、職業訓練所を運営、中学校と高校とも連携。この幼児教育から社会に出るまでの一連の機関を「CHANG スクール」とし、大学への進学や、日本への就職までを実現させている。ラオスでは崩壊寸前の小学校を建て直し、更に幼稚園と図書館を建設。タイではタイの子供財団（Foundation for Children）と協力団体となり、発達障がい児のための知育教育を共同で運営。HIV 治療施設の子どもたちとの交流も続けている。そして、ベトナムでは戦争で使われた猛毒により、重度の障がいを持って生まれた子どもたちが暮らす施設を定期的に訪問。こうした活動を通じて、子どもたちの将来の自立と共に、弱い立場の人や貧しい村を救ってくれる人が一人でも多く育つことを願っている。

この度は荣誉ある賞をいただき、心より感謝を申し上げます。盛大なセレモニーと安倍昭恵会長からの表彰に感動いたしました。そして他の受賞者様の活動への熱い想いとパワーに刺激を受けることができ、大変にありがたく、活動への決意をより深めることができたセレモニーだったと振り返っております。

さて、私たちの活動の目的は「東南アジアの子どもたちの生活と教育を支え、自立に導くこと」です。そのために、カンボジアでは孤児院、幼稚園、学習塾、職業訓練所を、タイでは知育教室を運営。ラオスでは小学校と幼稚園を建設、ベトナムでは重度障がい児の施設をサポートするなどの活動を行っております。

こうした活動の中で最も自己評価していることが、カンボジアの孤児院出身の男の子が、昨年、技能実習生として日本に就職したことです。劣悪なスラムで生まれた子が、私たちの施設、学習塾、職業訓練を経て、更に日本語学校に通い、今、日本で一人で生活をしていることは、正に私たちの目標とする「自立」です。また現地でも同じようにサポートをした子が、日本語の先生になるなど、少しずつではありますが自立を実現した子が出てきております。

今まではスラムで生まれ育った子にとって、日本で働くとか、先生になるなんて夢のような話でした。しかし、一緒に育った仲間がそれを実現させたことから、これが夢から具体的な目標へと変わり、次々に大学や日本語学校への進学を希望する子が増えているのです。私たちはこれからも益々、この意欲と目標をしっかりと支えてくことが最大の役割であることを意識して活動してまいります。

そしてこうした海外での活動と同時に力を入れていることが、「日本の子どもたち



へこの活動を伝えること」です。現在は複数の児童館で小中学生にお話し会をしており、この活動を知ることによって「私もやってみよう」という子が増えることは、とても嬉しいことです。そして同時に、「途上国から学ぶこと」がたくさんあることを意識して話をしております。これによって、どちらが上でもなく、お互いが理解し、尊重し合える関係ができれば、それは美しい世界につながる大切なきっかけになると考えており、今後もこうした国内での活動も積極的に進めていく決意です。

最後になりますが、今回同時に受賞させていただきました方々の益々のご活躍をお祈りすると共に、日ごろから応援して下さいの皆様へ改めて御礼を申し上げます。

会長 齊藤 興仁



▲活動の中心となっている孤児院 (CHANG ファミリーハウス・カンボジア)



▲日本のおもちゃに大喜び (CHANG 幼稚園・カンボジア)



▲日本語・英語・PCも指導 (CHANG 学習塾・カンボジア)



▲盲目の少年はピアノ、少女はピアノでCDデビュー (治療施設・ベトナム)



▲現地との連携はとても大切。行政、村長、校長と打合せ (ラオス)